

ESD最終年における、持続可能な社会の担い手の育成

～英語プレゼンテーション能力の育成を主として～

岡崎市立新香山学校 ESD 研究部

〒444-2141
愛知県岡崎市桑原町大沢20-81

<http://www.oklab.ed.jp/sinka>

1. 研究の背景

本校は平成 22 年からユネスコの提唱するESDの「持続発展可能な教育」を視点にした研究を行い、平成 24 年にユネスコスクールの認定を受け、同年 11 月には「持続可能な社会の担い手を育てる教育」をテーマに、責任性・連携性・相互性・多様性・有限性・公平性のESDの6つの視点をもとに、研究発表会を開催した。本校のESDに関わる実践は、愛知県公立教員全職員へ配付する「教員研修の手引き」の巻頭で紹介されたり、ESDカンファレンスで発表したりする等、実践と成果を示してきた。平成 26 年度はESD最終年として、本県と岡山県で、この 10 年のESDの成果を発表する会議が行われることが決まっている。

さて、本市では英語教育の重要性と可能性を見据え、文部科学省から英語教育特区を受けたり、タブレットPCを利用した英語授業を実施したりするなど、英語教育に力を入れている。また、文部科学省は 2020 年から小学校に英語科を設置すると発表し、グローバル社会での英語能力向上を目指している。

愛知県では、平成 22 年にCOP10 が開催され、環境問題についての子ども会議が開かれた。各国から子どもが集まり盛り上がった会議であるが、日本の子どもで積極的に会議に参加できたのは帰国子女がほとんどで、英語能力の必要性が明確となった。また会議の内容から、環境問題から経済や政治面にも広がり、英語能力だけでなく、多様な知識とで多面的な考え方が出来ることも必要であることも課題となった。

こういった経緯から本校では、平成 24 年度の研究発表以降、ESD最終年に向け、ESD会議参加やESDの理念を今後継続してカリキュラム化するため、社会・理科・英語科の教諭を中心に、社会問題を英語で話すことのできる生徒の育成を目指してきた。その手立てとして、①社会・理科・総合的な学習の時間を使った環境問題や経済問題などの学習の充実②英語で話す・書く・伝える能力の向上③スライドショーなどを使ったプレゼンテーション能力の育成の3つを柱として研究実践をしてきた。本年度は、ESD最終年として、本研究についてもまとめの年と考えた。ESD子ども会議などの周辺会議に生徒が参加し、今までの成果を生徒が諸外国の方などへ発表できる能力を育成しようと考えた。

2. 研究の目的

英語の言語能力を始め、プレゼンテーション能力、ICT能力を高めること。また、ESD子ども会議などのESD周辺会議に積極的に参加し、他校や諸外国の方に本校の実践を伝え、意見交流をすること。

3. 研究の方法

本研究では、ESD最終年での発表活動で、英語で環境問題や社会問題を話せる生徒の育成を目指し、次のA～Cを実施する。1つ目の方法として、パソコン室生徒用PCに英語指導用簡易コミュニケーションアシストシステムを導入し、会話や発表を増やす授業を展開し、生徒の英語力を育成していく。2つ目の方法としては、パソコン室以外に多目的室にプロジェクタを設置し、PCによるプレゼンテーションやデジタル教科書により、資料集めから発表までのスキルを育成する。またタブレットPCを導入して、ICT活用の力を身に付けさせていく。3つ目として、朝のショートタイムの時間などを利用し、教室用のデジタルテレビを使った、スライドを利用した1分間のディスカッションタイムを行う。生徒はできるだけ英語でのプレゼンテーションを行い、英語の能力の育成を図る。

(1) 英語授業の充実

①英語指導用簡易コミュニケーションアシストシステムの導入

パソコン室に、生徒の英語会話や発表を、マイクとヘッドフォンを通して全体、個別、任意のグループで行え、また録音することで聞き直す事ができる簡易コミュニケーションシステムを導入する。ネットワーク電話またはスカイプ等のツールを利用してシステムを構築してPC室PC41台全てに導入する。

②授業展開の工夫

文法や単語の習得の授業を改め、コミュニケーション中心の授業にする。PC室を利用できないときも英語での会話に時間を割き、文部科学省も進めるオールイングリッシュでの授業を目指す。

(2) 英語指導、総合的学習の時間での資料収集、発表スキル向上のための環境整備

①使いやすいICT環境整備

本校は普通教室には、50インチデジタルテレビとノートPCが整備されているが、その他の教室は未整備である。社会・理科・総合的学習の時間での環境問題や社会問題などの資料集め、調べ学習、英語指導用のデジタル教科書利用、プレゼンテーションソフトの利用ができるように、多目的室にプロジェクタとスクリーンを常時設置し、利用環境を整え、全教科・領域で積極的な活用を図る。また、授業効率や利用の幅を広げるために、テレビ会議の実現やワイヤレス機器が利用できるICT環境の整備をして授業支援を行う。

②文部科学省田村調査官からの指導

平成24年の研究発表を機に、田村調査官からの指導を継続的に受けている。ESDの視点を取り入れた指導の方途や方針を監修していただき、総合的な学習の時間を中心に環境問題・社会問題を充実させる。

(3) 写真を利用したMDT（ミニディスカッションタイム）の実施

授業前のST（ショートタイム）時に、環境問題等をテーマにしてMDT（ミニディスカッションタイム）を実施するもので平成23年から始めている。本研究では、生徒がデジカメで撮影した写真や資料をもとに、自分の意見を述べ、それを起点にディスカッションを進める。例えば、ゴミ箱の中身の写真を提示して、分別についての意見を言い、学級でゴミの分別についての意見を討論する。また、自動車が排気ガスを出す写真を提示し、大気汚染についての討論になることなどがある。写真を提示してそれについての意見を1分行ったあとの3分間を討論タイムとして、聴衆生徒と意見を交わす。1人あたり年間10回程度行うことができる。また、簡単なテーマの場合には、培った英語力を駆使し、最終的に生徒が英語を使って発表と討論ができることを目指し、海外の生徒との発表・討論を想定する。

(4) ESDフォーラム等での発表活動とユネスコスクール認定校等との交流

ESD最終年の子どもカンファレンスや環境学習フォーラム等へ積極的に参加し、発表活動を行う。また、同じユネスコスクール認定校等との学習交流をすることで、学習活動の成果をお互いに共有し、地域のローカルな活動や問題提起から、地球規模のグローバルな視点での考え方や行動の推進を目指す。培った英語能力を生かすためにも、海外の学校との交流を目指している。

4. 研究の内容・経過

(1) 研究推進会議

内容：研究方針、ESDの視点、研究内容の具体的な実施案提示、役割分担、スケジュール提示、授業モデルの提案等の重要事項検討、参考専門書の購入等の検討をする。

(2) 研究全体会

内容：研究内容について部員への提案、説明、詳細検討、研究概要配付、環境学習の進め方について主に説明した。

(右図参照)

また、文部科学省田村調査官との研究についての打ち合わせのご指導を受ける計画を立てた。

(3) 英語授業研究会

英語指導の方法と写真を使ったMDT(ミニディスカッションタイム)の方法について、財団授賞式での黒上先生からのご指導を説明し、実施の方法を検討する。また、英語指導用のICT環境の整備について検討をする。

(4) 多目的室へのプロジェクト

設備機器・ワイヤレスICT機器整備

多目的室へプロジェクトを設置し、教室でPCやタブレットPCが利用しやすいように、無線LANアダプタを設置した。(次ページ写真)

ESD新香山プラン

I 「何を学ぶか」 ESDの6つの視点で環境学習を見直してみると学ぶべきキーワードが浮かび上がる。

	1年「動物たちとの共生社会を考えよう」	2,3年「持続可能な社会づくりのための共生を考えよう」
感受性を磨く	S : Solidarity 相互性 自分自身や自分の住む地域と自然、社会、未来とのつながりに気付く。	つながり(人、社会、自然、未来)を意識して行動することの大切さを理解する。
	H : Highly-diverse 多様性 生き物の立場で環境の変化を実感し、生態系の意義や生物多様性の大切さを理解する。	様々な立場(消費者、生産者、地域住民、震災に遭った中学生)で考え、違いを理解する。
	I : Incessancy 有限性 地域の環境変化の背景が地球規模であることに気付く、このままでは地球が維持できないことを実感する。	資源・エネルギーは有限であることを理解し、エコ活動の必要性を実感する。
倫理観を高める	N : Non-discriminatory 公平性 生き物と人間との共生社会の必要性と折り合いをつけて生活することの難しさを理解する。	世界の人や未来の人と平等にエネルギーを使っていくことの大切さに気付く。
	C : Commitment 責任性 生態系や環境の変化は人間の生活が関係していることを理解し、その責任を実感する。	世代を乗り越えた倫理観を大切にして、自分事としてとらえる。
	A : Act in union 連携性 みんなで話し合い、取り組む必要があることを理解し、行動の意欲を高める。	地域や社会全体で取り組む必要があることを理解し、将来にわたる行動の意欲を高める。

II 「どのように学ぶか」プログラムの身に付けた力とESDの7つの能力・態度は、以下のように共有化することにした。

	CATCH	ACTION	REFLECTION
① 批判的に考える力	A 課題識別・設定能力		
② 未来像を予測して計画を立てる力	A 課題識別・設定能力		
③ 多面的、総合的に考える力	A 課題識別・設定能力		
④ コミュニケーションを行う力		B コミュニケーション能力	
⑤ 他者と協力する態度		C 自他の理解能力	E 環境社会設計能力
⑥ つながりを尊重する態度		D 活動環境整備能力	F ESD実践力
⑦ 進んで参加する態度			F ESD実践力

さらに①～⑦の能力・態度を探究のスパイラルに合わせてみる。



探究のスパイラル

① 批判的に考える力

② 未来像を予測して計画を立てる力

③ 多面的、総合的に考える力

④ コミュニケーションを行う力

⑤ 他者と協力する態度

⑥ つながりを尊重する態度

⑦ 進んで参加する態度

感受性

倫理感

III 「どうやって進めるか」手立てと方法を「つながり」をキーワードにして指導案に明記するようにした。

例) 視点、能力・態度、留意点の関連表 「未来の日本と地球のために私たちができること～ECOアクションを振り返る～」より

視 点	つながり			活動	手立てのキーワード
	教材	人	動 画		
S 相互性					◎: ESDの視点と能力・態度の両方にかかわった手立て ○: ESDの視点にかかわった手立て ▲: ESDの能力・態度にかかわった手立て
H 多様性	◎	◎		4, 5	「ゆうだい君の手紙」をゆきぶり資料として使用する。
I 有限性	○				未来志向で原子力発電を考えたとき、安全性が課題であることをおさえる。
N 公平性					
C 責任性	◎	○	◎	3	自分たちがこれまで行ってきたエコ活動で節電できるかどうか、体験をもとにした話し合いを構成する。
A 連携性	○	◎	◎	5	持続可能な社会実現に向けて追究課題を設定する。
批判的に考える力	▲		▲	4	持続可能な社会をイメージするために50年後という視点を設ける。

(5) 総合的な学習の時間研究授業 総合的な学習の時間でのESDの視点に立った環境問題への取り組み

【学習テーマ】在来種と外来種の分布を示すバランスマップ作成、
原子力に頼らない新エネルギー利用と生活改善、

現在の環境から予測する将来の地球環境、私たちができるESD、
獣害と向き合う生活改善 等

これらの学習は、ESDの視点から活動を行い、環境学習に関わる
基礎的な知識と考え方、地域の実態に合わせた生活改善などを考え、
本校のESD実践の基盤となる。



(6) 英語科研究授業 コミュニケーションを中心とした授業実践

設置したプロジェクタとタブレットPCを利用して、コミュニケーション中心の授業を行った。事業には、ALT（アシスタントランゲージティーチャー）を指導者に加え、授業での生徒のコミュニケーション量を増やしていった。タブレットPCの設定は業者に協力してもらった。

（下左コミュニケーションタイム、下中タブレット利用写真）



(7) 夏休み中のESD関連会議・研究会等への参加

以下の会議や研究会等に参加し、発表や実践を行った。

- ・あいち環境研究会ESD分科会ワークショップ in 東三河（豊川）参加生徒2名（上右写真）
- ・伊勢湾・三河湾・堀川浄化の集い（名城公園）参加生徒6名
- ・岡崎市親子エコ・クッキング講座（岡崎 東邦ガス）参加生徒12名
- ・こどもエコクラブ&ESDフォーラム in 愛知（名古屋）参加生徒2名
- ・なごや生物多様性サマースクール2014（名古屋）参加生徒2名
- ・蒲郡の海岸でわくわくビンゴ&アート体験！！（蒲郡）参加生徒4名
- ・中学生対象の各種英語スピーチコンテスト（岡崎）参加生徒16名

（これらの旅費は、乗車券を購入したために、領収記録がなかったので、旅費として充てませんでした。）

(8) 研究視察 横浜市立永田台小学校 全国環境教育研究会参加

本校のESDの取組である環境学習実践を、この研究にて発表し、他地区の発表と比較して、今後の研究に役立てようと考えた。小学校の取組と中学校の取組の違いなどよくわかり、横浜市の小中高校の異校種の連携が非常に効果的であると感じた。ESDの視点から近い世代の者が連携して、環境問題や生活改善に取り組む実践は、今後本校も考えていきたいと考えた。

(9) テレビ会議システム利用の交流

原子力に頼らない新エネルギーを考えることを主題に、テレビ会議システムを利用し、国内のユネスコスクール登録校との交流学习を行った。この交流では、地域によるエネルギー利用の考え方の違いが理解

できた。東北地方では、原子力発電からの転換意識が強く、生活改善まで至っていることに、本校生徒は驚いた。生活に影響がない地域の考え方は非常に甘いことがわかった。(右テレビ会議の様子)

(10) 写真を利用したMDT (ミニディスカッションタイム)

右の写真は教室のデジタルテレビに、平均気温の年度による上昇のグラフが写されている。ワイヤレス提示機で資料を提示し自分の意見を言っている場面である。

これを週3回行い、生徒の発言力、プレゼンテーション能力を養った。

(11) ESD発信・交流会議への参加

今まで学習してきた環境学習や地域活性などに関する学習の成果をESD名古屋と岡山で発表した。右写真は名古屋での発表の様子である。

これらの発表のイントロダクションでは、英語を使って発表している。また名古屋と岡山以外にも、フィリピンとの交流プログラムに参加し、世界的な環境問題やそれぞれの国の文化理解を積極的に行った。

生徒は、それぞれの発表には違いがあるが、温暖化や大気汚染、民族紛争など、同世代が同じ課題に真剣に向き合っていることを知ることができた。

右写真は、1泊2日で交流したフィリピンの生徒とのお別れの時の様子である。

(12) 文部科学省田村調査官からの指導

1月に環境学習のまとめとなる授業を参観していただき、ESDの取組をはじめ、本研究の現在の進み具合や今後の方向性を指導していただき、良好の評価を受けた。



5. 研究の成果

(1) 持続可能な社会の担い手の育成

ユネスコが提唱するESDの理念を持った、次代に向けた「持続可能な社会の担い手」育成するには、本研究のような、地域に起きている環境や社会問題を地球規模の問題と関連づけ、「自分事」としてとらえ「考え・行動」できる人材を育てることが大切である。このために大切なことは、知識を得ること、地域を知ること、他の立場を考えることをトレーニングすることであることがわかった。これをいかし、積極的に地域や環境・社会問題に関わろうとする人材とするには、発表会やイベントに広く出向き、多くの方と交流することである。本校に来ていただければわかるが、息の長い発言や立場に応じた発言ができ良になってきた。

(2) 国際社会で、英語で環境問題、社会問題を話せる人材の育成

学んだこと考えたことを表現するには、内容の充実と英語力が重要であることは、間違いない。写真を利用した英語のMDT（ミニディスカッションタイム）は、短い討論であるが、積み重ねにより、話ができるようになる。本校の生徒は、将来の職業として、国連に勤めたいとか、外国で活躍したいということを言う生徒がかなり増えている。（実感として2割程度）

世界的な舞台で、国際社会を築こうとする人材を育成できると考えてきた研究の成果である。

PCを利用し、写真を使ったプレゼンテーションや編集をすることができる。

6. 今後の課題・展望

ESD最終年として岡山と名古屋で会議が行われたが、ユネスコや文部科学省は来年度以降もESD関連プログラムを実施する予定である。本研究により、会議やイベント参加、プログラムの体験などが非常に有効であったことから、今後も積極的に生徒を参加できるようにしていき、学習内容を発表したり、英語で交流したりすることができるようにしていく。

今後も、多くの方々の支援と指導を受けながら本研究を今後も続けていきたいと考えている。

7. おわりに

本研究は、本校が平成24年度に研究発表をしたESD実践を上げたものである。ただし、同じ学習内容を踏襲していても研究は進歩しない。英語やICTを利用して培った生徒の力を今後とも伸長し、幅広い活動につながるように、改善していこうと考えている。パナソニック財団の関係の皆様、文部科学省の田村調査官には大変なお力添えをいただきました。深く感謝申し上げます。